エディブル・ランドスケープの形成への住民の意識に関するケーススタディ

A Case Study on Resident's Awareness of the Meaning and Role of Edible Landscape

木下 勇*

Isami KINOSHITA

摘要：これまでエディブル・ランドスケープについてコミュニケーションの媒体としての意味を明らかにしてきたが、本研究では居住者による現在の敷地内の食べられる植物の植栽に対する意識および公共空間におけるエディブル・ランドスケープの形成に対する意識を、子ども時代の体験や記憶との関連から分析した。その結果、子ども期の体験は敷地内のエディブル・ランドスケープの形成に影響をもち、またその他の人物追想など個人の記憶によって、現在の敷地内のエディブル・ランドスケープの要素は多重の意味を有しているが、公共空間のエディブル・ランドスケープにその意味の付与が希薄であり、この点に配慮した住民の関わりが課題としてとりだされた。

1. はじめに

エディブル・ランドスケープとは米国にて家庭園芸の中で提唱され、エコロジーに視点を置いた住宅地形成などにも使われてきた言葉である¹⁾。「食べられる植物によって植栽が施された環境」を意味するものとして、ここでは都市の住環境（私的領域から公的領域まで含めて）にあてはめて使用する。筆者等はこの概念で都市の住環境を観察およびヒアリングをしてその意味や役割を抽出してきた²⁾。それによるとエディブル・ランドスケープには、①季節感や収穫の喜び、②記念や思い出などの特別な意味、③縁起担ぎなどの民間伝承、民俗的慣行、④管理の苦勞を伴うが環境への貢献意識、⑤家族や近隣のコミュニケーション、といった意味や役割があることが示された。この聞き取り調査の中で居住者の何らかの記憶がエディブル・ランドスケープへの意識に影響していることが示唆されており、その点についてさらに追求することが課題として残されていた。そこでここではまず第一に、子ども期の体験に注目して、それと現在のエディブル・ランドスケープへの意識や関わりとどのような関係があるのかを見てみたい。第二には、子ども期の体験のみならず記憶がこれらの環境への意識に関わりがあるとしたら、それがどのような関連によっているのかを明らかにしたい。

以上の2点を目的に本研究では都心部と郊外部の都市化の空間軸上で比較しうる3地区を選定し、実施したアンケート調査をもとに解析を進める。対象地は既発表論文²⁾同様の根津地区（文京区根津2丁目）、太子堂地区（世田谷区太子堂2丁目）、国分寺新町地区（国分寺市新町1—3丁目）である。アンケートは観察や聞き取り調査をもとに調査票を組み立て、1999年の1月末に、約1000票（国分寺新町地区のみ983票）を各地区に無作為に配布し、郵送による回収とした³⁾。

2. 子ども期のエディブル・ランドスケープ

子ども期の体験に注目した風景論についてはこれまで数多く言及されてきた⁴⁾。しかし、エディブル・ランドスケープに特定して論じたのはこれまで見られない。もちろん、食べられる植物の採取の体験は子どもの自然との接触をはかる重要な指標という指摘はある⁵⁾。それゆえに、居住者の敷地内や公共空間のエディブル・ランドスケープに対する意識に子ども期の体験が影響しているのではないかという仮説を立ててみた。

子ども期に身のまわり（家の周りや道端など）の食べられる植物を「よく採って食べた」という回答者は70～80%になる（表1）。これを子ども期に過ごした地域別にみると、「よく採って食べた」という回答は農山漁村や地方都市では90%前後と高いが、大都市部でも66%を占める⁶⁾（表2）。その採って食べた種類を列挙してもらった。それによると、各地区ともカキがトップであり、次にヨモギやイチジクが上位3位内に続く（表3）。さらに続いて上位10位内を占めている種類に、グミ、ザクロ、クリ、クワ、ビワ、ウメ、キイチゴといった果実とセリ、ツクシ、ノビルといった野草がある。これらが定番の子ども期の「食べられる景観」要素といえよう。ただし回答者は成人、しかも年配層（50代以上が約55%²⁾）になっていることから、ある時代の共通した「食べられる景観」の要素ということであり、現代についてあてはまるとは断定できない。

そこで、現在の敷地内における食べられる植物の有無と子ども期の食べられる植物の採取体験との関係を見る（表4）。敷地内に食べられる植物が「ある」者では、子ども期に「よく採った」という者が83%も占める一方、食べられる植物が「ない」という者では子ども期に「あまり採らなかった」という者が32%にもなる。独立性の検定において有意水準1%未満で棄却されるように、両者の相関は高いといえる。

そこで、子ども期の食べられる植物の採取体験と現在の子どもや若い世代に教えているかという項目間のクロス分析を行なった（表5）。すると、子ども期の採取の体験と現在への子どもや若い世代へ教えたりする行為との相関の高さが示されている。

次に、地域の中を散歩したり外を歩いているときに周りにある食べられる植物を注意して見ているかと聞いてみた。これには各地区とも大きな差はなく、「よく注意して見ている」という者が20%程度、「時々気がつく程度」が60%、「ほとんど関心がない」という者が20%程度という分布となっている。そこで、これを子ども期の採取体験とクロスしてみる（表6）。この点についても子ども期によく採ったという者の方がよく注意して見ているように相関関係がみられる。

以上のように子ども期に身の周りの食べられる植物を採って食べたりした体験は成人してから居住環境に食べられる植物を導入したり、関心を持ち、また子どもや若い世代へ教えたりする行動に大きく影響していることが明らかとなった。

*千葉大学園芸学部

さて、子ども期に採取し食べた体験のある植物と現在の敷地内に植栽されている食べられる植物とのリストを見比べてみる。記憶と現在の状況という性格の差があり、直接比較しうものではないが、この比較である程度の時代的変化が推察できる。特に子ども期に採って食べた上位3位に入っていたイチジクが極端に現在の植栽のリストから低位に位置づいている点が興味深い（国分寺新町で4件の回答が最多で50位に相当）。イチジクは栄養価が高く、またその干したものは緩下剤として、乳液は痔などへの薬効もあり実利性も高い。年配層の子ども期にはその時代状況からもイチジクはその実利性で価値づけられていた。一方、果樹を庭に植えることは忌み嫌われる風潮がある中で特にイチジクはその代表的な例として言われてきた。アンケートの記述にも「通りすがりの方々に『家の周りにイチジクはいいものではない』と言われ、それ以来果実モノは…」（K3186⁷⁾、62歳女性）というような指摘が散見された。都市の過密化の中で株立ちで横に広がるイチジクの育成が難しくなっている点や、台所近くなどの低湿地に植えられている風景が、乾いた空気を求める都市化の時流に合わなくなった点も考えられる。その他、様々な要因が考えられる⁸⁾が、ここではそういった原因の特定よりも、現在、ハーブ類の植栽が盛んなようにエディブル・ランドスケープの変化には時代の流行や居住者の意識が反映されている点に注目したい。

3. 食べられる景観の記憶・意味

観察調査の際にそれぞれの敷地内の食べられる植物を植えている理由等について聞いた中で、特別な思い出や意味合いを居住者が語る点が注目された。もちろん食べられる植物以外の花木にもそのような意味合いはある。しかし食べられる植物については食という根源的なところに関わるのか、または世話のかかる分それだけに思いが強いのかその類が多いようである。そこでアンケートにても敷地内の食べられる植物について聞いたところ、特別な思いや意味を有するものと答えたのは60%にのぼった。

この点についてアンケートに寄せられた自由記入の記述をK J

法の要領でラベル化を行ない、それぞれを分類していった。計196件の記述の全貌を示すことは紙面の都合でできないので大項目、中項目の分類を示したのが図1である。その結果、既報告の聞き取り調査における類型区分に近似した区分が可能であること、およびそれらの細目に関する詳細および類型項目間の関連性について、より明確に把握できた。ただし聞き取り調査ほどには「縁起かつぎ」など民俗慣行の例は強く表れていない。これは記述式という調査方法の違いの影響も考えられる。

また、聞き取り調査の傾向よりも強く表れているのが、「人物追想・形見」といった意味である。家族の故人が大切に育てていた果樹や友人からいただいたものなど故人を偲ぶ形見としての思いが投影されている類である。また、【思い出】の類では、実家の記憶や子ども時代の味覚の体験など原風景に関連する事柄も少なくない。それらのいくつかを以下に例示する。

「幼い時自宅の庭にイチゴが成っていて良く食べた。その思い出を忘れられなくて現在の庭にもイチゴを植えている。」(T2135, 50歳男性)

「育った家に柿、ブドウ、梨等があり、自然に今のように実のなる木を植えていた。亡くなったお袋が好きで植えた柿の木は、毎年実がなる。北国で育ったので、ミカンのなっている風景があこがれだった。」(K3006, 69歳男性)

「子どもの頃、庭で採れる果物がおいしく、楽しかったもので、果樹を植えてます。」(K3102, 71歳女性)

「アケビを見ると疎開先の福島のことを思い出す。」(N1033, 57歳男性)

なお、被調査者に年配層が多かったためか、子ども期の味覚の記憶の中では戦中、戦争直後の時代の記憶の記述が目立っていた。食物に困窮していた状況の方がこの味覚の記憶を鮮明に覚えているのであろうか。

なお、聞き取り調査の結果と同様、食べた後の果実の種を蒔いたらそれから芽が出て育ってきたというような実生の果樹への感嘆も交じった愛着も多い。これにはその当事者の人物の追想と重

表-1 子ども期の食べられる植物の採取

	よく採って食べた	あまり採らなかった	不明	全体
根津	124	50	0	174
	71.3%	28.7%	0.0%	100.0%
太子堂	129	36	1	166
	77.7%	21.7%	0.6%	100.0%
国分寺新町	243	45	0	288
	84.4%	15.6%	0.0%	100.0%
全体	496	131	1	628
	79.0%	20.9%	0.2%	100.0%

独立性の検定 **:¹%有意 *:⁵%有意
χ²乗値 自由度 P値 判定
11.396453 2 0.0034 **

表-2 子ども期の食べられる植物採取体験と子ども期過ごした地域

	大都市	地方都市	農山漁村	不明	全体
よく採った	180	159	136	21	496
	66.4%	88.3%	92.5%	70.0%	79.0%
あまり採らなかった	91	20	11	9	131
	33.6%	11.1%	7.5%	30.0%	20.9%
不明	0	1	0	0	1
	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.2%
全体	271	180	147	30	628
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

独立性の検定 **:¹%有意 *:⁵%有意
χ²乗値 自由度 P値 判定
53.406847 2 0.0000 **

表-3 子供のとき採った食べられる植物の種類

(a)根津地区						(参考:自宅現況)						(b)太子堂						(参考:自宅現況)						(c)国分寺新町						(参考:自宅現況)					
種類	件数	家の庭	他人の庭	道端	その他	種類	件数	家の庭	他人の庭	道端	その他	種類	件数	家の庭	他人の庭	道端	その他	種類	件数	家の庭	他人の庭	道端	その他	種類	件数	家の庭	他人の庭	道端	その他						
総計/80	400	148	54	114	121	総計	345	総計/84	455	228	54	82	121	総計	404	総計/121	914	398	102	231	297	総計	1148												
1 カキ	53	36	16	3	2	シソ	35	1 カキ	60	52	10	4	1	シソ	40	1 カキ	111	90	23	4	8	シソ	87												
2 イチジク	35	24	8	2	1	ハーブ*	29	2 イチジク	37	30	7	2	0	カキ	31	2 ヨモギ	93	4	3	61	42	ヨモギ	77												
3 ヨモギ	32	2	1	20	15	アロエ	22	3 ヨモギ	37	2	0	19	19	アロエ	26	3 イチジク	59	47	9	2	4	カキ	60												
4 セリ	19	0	0	9	11	サンショウウ	20	4 グミ	25	12	8	2	8	サンショウウ	25	4 グミ	59	26	14	15	20	サンショウウ	59												
5 ザクロ	17	9	3	2	2	ミニトマト	17	5 クリ	21	15	5	2	3	ウメ	20	5 ツクシ	35	1	1	16	20	ユズ	49												
6 ビワ	16	10	5	3	1	バジル	15	6 キイチゴ	20	5	2	9	8	ハーブ*	20	6 キイチゴ	32	3	3	15	15	ハーブ*	47												
7 グミ	15	5	2	6	3	カキ	13	7 ザクロ	14	9	1	3	1	バヤリ	14	7 クワノミ	32	4	2	15	12	ミツバ	45												
8 キンナン	14	0	1	6	8	バヤリ	12	8 ウメ	13	12	1	2	0	イチゴ	13	8 セリ	32	1	0	13	23	ミズマタ	44												
9 キイチゴ	12	2	0	6	6	ナス	11	9 ツクシ	13	1	0	7	8	ビワ	13	9 クリ	30	15	7	1	11	アロエ	45												
10 クワノミ	12	1	1	7	4	ヘメリンゴ	11	10 セリ	12	1	0	3	8	ミニトマト	19	10 /ハビル	27	3	0	14	15	セリ	41												
11 クリ	10	4	2	2	4	イチゴ	10	11 クワノミ	11	3	1	2	5	カキ	12	11 ビワ	20	16	3	0	1	ミズマタ	32												
12 ツクシ	10	0	1	8	3	ミヨウガ	7	12 ヒワ	11	6	3	1	2	ネギ	11	12 ウメ	19	17	1	0	1	イチゴ	26												
13 /ハビル	9	0	0	8	3	ミズバ	7	13 ユズラウメ	15	13	4	0	0	バヤリ	11	13 ザクロ	16	11	3	1	1	ナス	22												
14 イチゴ	8	6	1	0	2	ミツバ	7	14 シソ	9	7	2	0	1	ミツツ	11	14 ユスラウメ	15	13	4	0	0	キンナン	20												
15 フキ	7	2	0	0	4	ネギ	7	15 /ハビル	8	1	0	3	5	ミヨウガ	10	15 モモ	12	10	1	0	0	ブルーベリー	20												
16 モモ	6	5	0	0	0	ネギ	7	16 ブドウ	8	7	0	0	1	ナス	8	16 アケビ	11	2	0	1	8	ネギ	19												
17 シソ	5	4	0	0	1	ヒワ	5	17 フキ	7	1	0	2	3	ヘメリンゴ	6	17 イチゴ	10	6	0	2	1	バジル	19												
18 スイバ	5	0	0	4	3	ローズマリー	5	18 モモ	7	6	1	0	0	クチナシ	5	18 シソ	10	9	2	2	0	ミカン	16												
19 フキトウ	5	0	1	3	3			19 キンナン	6	0	0	2	4	トマト	5	19 フキ	10	4	1	2	3	キュウリ	15												
20 ウラビ	5	0	0	1	4			20 ミヨウガ	6	5	1	0	0		5	20 ブドウ	10	9	0	0	1	ニラ	15												
								21 アケビ	5	3	1	1	1		5	21 キンナン	9	2	2	5	3	コラ	15												
								22 リンゴ	5	2	0	0	2		5	22 ミカン	9	8	2	0	1	アネシ	13												
																23 ワン	9	0	0	4	9	クチナシ	13												
																						フキ	13												
																						ユスラウメ	13												

注:根津・太子堂地区は5件、国分寺新町地区は9件以上
掲載の種類を掲載

フキ、フキトウは時期の違いがあるので別個にした
(参考:自宅現況)に自宅敷地内現況の食べられる植物のリストを掲載(注2)の文庫の部分再録

ハーブ*:アンケートの回答にハーブとしか記載がなく、実際の品種名は不明のもの。その他西洋ハーブ類で個別品種名の記載のある物はこれと区別して個別名のまま集計

なる場合もある。

またその追想は「記念」の類とも重なってくる。

「(この柿の木は)父(九六歳)が主人(七〇歳)が生まれたときに植えた記念と聞いています。今は老木で近所の方々には秋になると葉が落ち大変迷惑をかけていて、その意味でも近所の方々に実が熟したときにお配りしています。」(T2048, 61歳女性)

この例は便宜的に「記念」の区分に入れているが、その他「維持・管理」,「コミュニケーション」の区分にも関わるように、実際の例の中には便宜上の類型区分をつなげるコンテクストを示し

表－4 食べられる植物の子ども期の採取体験と現在敷地内の存在

	現在敷地内に食べられる植物がある			ない	不明	全体
よく採った	373	122	1	496		
	83.3%	68.2%	100.0%	79.0%		
あまり採らなかった	74	57	0	131		
	16.5%	31.8%	0.0%	20.9%		
不明	1	0	0	1		
	0.2%	0.0%	0.0%	0.2%		
全体	448	179	1	628		
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		

独立性の検定 **1%有意 *5%有意
χ2乗値 自由度 P 値 判定
18.055238 1 0.0000 **

表－5 子ども期の採取体験と現在子どもへの教授

	よく教える	2・3回くらい	無い	不明	全体
よく採った	100	239	149	8	496
	20.2%	48.2%	30.0%	1.6%	100.0%
あまり採らなかった	8	46	76	1	131
	6.1%	35.1%	58.0%	0.8%	100.0%
不明	1	0	0	0	1
	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
全体	109	285	225	9	628
	17.4%	45.4%	35.8%	1.4%	100.0%

独立性の検定 **1%有意 *5%有意
χ2乗値 自由度 P 値 判定
38.180282 2 0.0000 **

表－6 子ども期の採取体験と外を歩いているときの関心

	よく注意	時々気がつく	関心ない	不明	全体
よく採った	116	317	62	1	496
	23.4%	63.9%	12.5%	0.2%	100.0%
あまり採らなかった	8	55	68	0	131
	6.1%	42.0%	51.9%	0.0%	100.0%
不明	1	0	0	0	1
	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
全体	125	372	130	1	628
	19.9%	59.2%	20.7%	0.2%	100.0%

独立性の検定 **1%有意 *5%有意
χ2乗値 自由度 P 値 判定
101.54717 2 0.0000 **

注 1: N:根津, T:太子堂, K:国分寺新町 数値は記述件数 注 2: 矢印は記述にみられる文脈の流れを示す。実線は2例以上、点線はそれ以下聞き取りからの判断。

図－1 居住者の記述にみられるエディブル・ランドスケープの記憶と意味の関連

ているものが少なくない。これは、その果樹なり、エディブル・ランドスケープの要素が同時に多重の意味や役割を持っているということでもある。図1の類型区分間の矢印は、被調査者の記述の文脈を読み取り、それらの例にある関係性を示したものである。同様の例として次のケースがある。

「大鉢のグミの木は昨年、妹の住むマンションの改修のため預かってきましたが、実がいっぱいついて真っ赤になると、どこからか野鳥がやってきて一つ残らず食べてしまいました。これはなしをしますと、妹は『鳥はきっと毎年来るでしょうからこのままここに置いておく』と言うのです。よく野鳥は狭い庭を訪れます。楽しみがまた一つ増えました。」(N1118, 58歳女性)

「維持・管理」面の記述には管理の難しさを記してある場合が多いが、このようにマイナスの要因を逆にプラスに転じて意味づけている場合も見られる。

なお、各地区の柿などの果樹類は近隣コミュニケーションの媒体として機能していたが、次の例のように建物の更新などによって、エディブル・ランドスケープの要素は次々と消失していく傾向も問題として指摘される。

「数年前まで大きな富有柿があり、成り年はとても見事でした。実は近所、知人に分け、人間関係の潤滑油でもありました。事情があり敷地が狭くなり建て替え時に残せなかったので痛恨の極み」(T2073, 65歳女性)

4. 公共空間のエディブル・ランドスケープに対する意識

一般に食べられる植物を公共空間に設けることは難しい。一つには管理面の問題があるが、食という個人の口に入るものは私物化となり、これが公共という性格に相容れない、という問題があ

表－7 子ども期の体験と公共の食べられる植栽への意見

	賛成	反対	不明	全体
よく採った	376	101	19	496
	75.8%	20.4%	3.8%	100.0%
あまり採らなかった	92	30	9	131
	70.2%	22.9%	6.9%	100.0%
不明	1	0	0	1
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
全体	469	131	28	628
	74.7%	20.9%	4.5%	100.0%

独立性の検定 **1%有意 *5%有意
χ2乗値 自由度 P 値 判定
0.6635356 1 0.4153

表－8 公共空間での食べられる植物に反対の理由

	美観上問題	盗難・私物化	世話な負担	その他	不明	反対全体
根津	15	9	1	4	2	31
	48.4%	29.0%	3.2%	12.9%	6.5%	100.0%
太子堂	14	8	3	6	5	36
	38.9%	22.2%	8.3%	16.7%	13.9%	100.0%
国分寺新町	20	16	11	14	3	64
	31.3%	25.0%	17.2%	21.9%	4.7%	100.0%
全体	49	33	15	24	10	131
	37.4%	25.2%	11.5%	18.3%	7.6%	100.0%

独立性の検定 **1%有意 *5%有意
χ2乗値 自由度 P 値 判定
6.6209927 6 0.3573

表－9 公共空間における食べられる植物への賛成者の関わり意識

	積極的に積分的に	ほんの手伝い程度	行政がするべき	その他	不明	賛成全体
根津	17	75	21	19	1	133
	12.8%	56.4%	15.8%	14.3%	0.8%	100.0%
太子堂	12	74	25	16	1	127
	9.4%	58.3%	19.7%	11.8%	0.8%	100.0%
国分寺新町	30	110	38	26	5	209
	14.4%	52.6%	18.2%	12.4%	2.4%	100.0%
全体	59	259	84	60	7	469
	12.6%	55.2%	17.9%	12.8%	1.5%	100.0%

独立性の検定 **1%有意 *5%有意
χ2乗値 自由度 P 値 判定
2.8919053 6 0.8223

る²⁾。しかし、現実に公共空間に存在する食べられる植物もあり、これらに対して聞き取り調査でも見守る住民の存在も知られている。さて、ではこのように公共の場に食べられる植物を植えることに對して住民はどのように評価しているのだろうか、アンケートで全体的な傾向をみる。すると各地区に大きな差はなく70数%の人が「賛成」としている。

それを、子ども期の体験との関連でみると、子ども期に食べられる植物をよく採ったという者とそうでない者との「賛成」の割合の差は5%程度であり、それほど有意の差が表れていない(表7)。「反対」は各地区とも30%弱であるが、その理由をみると「美観上の問題」が最も多く、根津地区で50%弱と比較的高い割合を占め、郊外の国分寺新町地区ではその値はやや低くなる(表8)。美観上の問題は果実が落下して放置されたままになっている問題の指摘が多く、それは密集市街地の方でより問題となるのであろう。自由記入の欄から例を以下に取り出す。

「ヨモギなど道端の草は、犬や猫の通り道だと思つて食べる気にはなれないし、大都会の道路ぞいの道端の木なども食欲とは遠いところのものに思える。」(N1063, 41歳男性)

なお、「盗られたり、私物化」という点を問題にするのは25%前後であり、管理の負担面の指摘はさらに少なくなる。太子堂地区では緑道の整備で食べられる植物をいくつか植えている。それに対して次のような指摘があった。

「遊歩道になった実を子ども達がとっていたら、大人の中にどろぼうと言う人がいました。すごく寂しい気持ちになりました。実ったものが落ちて汚くなるより子ども達が楽しむのであったらよいと思う、そのかねあいが難しいです。」(T2085, 56歳女性)

また、次のような問題の指摘もある。

「現在の社会情勢からすると、子供達がむやみに口にすることの方が問題だと思います。(農薬または人工的いたずら、もしくはダイオキシン等の不可抗力など。)」(K3147, 50歳男性)

自由記入の欄にある全ての意見をここで取り出すことは紙面の都合で無理があるが、否定的意見に比べて多くを占めている肯定的意見は、「花のみでなく実も楽しめ、心が和む」、「野鳥も多く来るようになる」、「子どもたちの体験に必要」、「コミュニケーションが活発になる」、「災害時の食糧」といった意見に代表され

る。一方、否定的意見からの問題点としては上記のような美観、汚染、犯罪、子どもたちへの伝え方などがあげられる。公共空間でのエディブル・ランドスケープの形成にて行政の管理には限界があり、何らかの住民の関わりが必要ということになろう。

そこで、賛成者にどの程度の食べられる植物の管理への関わりを意識を持っているかをたずねると、「積極的」なのは10%前後であり、「ほんの手伝い程度」が55%前後と最も多く、「行政がすべき」という回答は20%弱となる(表9)。もともと、個人の敷地内のエディブル・ランドスケープの形成にはそのような個人の記憶が働きやすいが、公共の場となるとそのような様々な個人的な意味内容の付与というものが希薄となる。その特性を考慮し、その代わりとなる何らかの意味の付与が課題となろう。

5. まとめ

子ども期に食べられる植物を採って食べた体験の強い者ほど現在の敷地内のエディブル・ランドスケープの形成に関わり、また地域内を歩いている時の関心も高く、現在の子どもの代若い世代へ教授している割合も高いという相関がみられた。

このような子ども期の体験や人物の追想、記念といった記憶が個々の敷地内の果樹などエディブル・ランドスケープの特定の要素に対する特別な愛着や意味を表し、また記念、思い出、実用、維持・管理、コミュニケーションといった意味内容の関連を持ちながら、多重の意味を表している場合も見られた。

一方、公共空間のエディブル・ランドスケープ形成に対しては賛同の声は多いが、美観や管理(被害も含む)の問題への危惧もあり、住民の関わりが不可欠ともいえる。この公共空間への賛否や積極的関わりには子ども期の体験との強い相関はみられず、個人の敷地内に見られたような様々な意味の付与というものが根本に希薄な点も考慮する必要がある。

なお本論文は(財)住宅総合研究財団、(財)第一住宅建設協会の助成を得た共同研究に基づくものであり、共同研究者(吉川仁・森まゆみ・望月南穂・林のり子・結城登美雄・藤井英二郎)をはじめ、生活工房「まちまち」、楽働クラブ、毎日の生活研究所、谷根干工房の諸団体や梅津政之輔氏および被調査者からの励ましと多くの協力があつた。末筆ながら関係者に感謝の意を記す。

補注・参考文献

- 1) 家庭園芸での提唱者 Rosalind Creasy は「食卓において健康的なものを運び、水や土、エネルギーの消費を切りつめ、食べられる植物をもちいて美しくよく計画された景観をつくること」(Creasy, [0] Rosalind (1982): "The Complete book of Edible Landscaping", Sierra Club Books, San Francisco, pp1-13) と言い、専門家は「植栽の大多数の部分が食べられるもの(果実や木の実、葉など)を提供する景観」という(カリフォルニア大学デービス校の Mark Francis 教授や Patsy Owen 助教授へのヒアリングより)。
- 2) 木下勇・吉川仁(1999): 都市におけるエディブル・ランドスケープ(食べられる景観)の意味と役割について～東京都下の三住宅地の実態調査から: 日本都市計画学会第34

回学術研究論文集, 361-366

- 3) 回収率は根津地区: 17.4%, 太子堂地区: 16.6%, 国分寺新町地区: 29.3%。なお、1998年12月時点の各地区世帯数は順に1643, 2269, 1097である。
- 4) 例えば、原風景という言葉提起した奥野健男(1972): 文学における原風景: 集英社、またその参考になっている、G. パッシュャール(岩村行雄訳1969): 空間の詩学: 思潮社、奥野の原風景をもとに子どもの遊び空間について研究した仙田満(1982): 原風景による遊び空間の特性に関する研究: 日本建築学会論文報告集322号、藤本浩之輔(1974): 子どもの遊び空間: NIKK 出版などがある。
- 5) 木下勇(1992): 都市との比較からみた農村の児童の自然との接触状況～児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究(その1): 日本建築学会計画

系論文報告集第431号, 107-118

- 6) 地域の3区分はアンケートにおいて厳密に定義づけているわけではなく、被調査者の受け取り方に任せてある。その結果、子ども期過ごした地域では、大都市: 40%強、地方都市: 30%弱、農山漁村: 20%強と、各地区にはそれほど大きな地域差はない(大都市の項目で根津: 46.0%, 太子堂: 47.0%, 国分寺新町: 39.2%と少し差が見られる程度)。
- 7) N: 根津, T: 太子堂, K: 国分寺新町 番号はサンプル識別番号
- 8) その他、「イチジクは傷みやすく、季節が短く、店頭に並ぶ時期が短い。そのため、買う果物としては認知度が低い」、「果実の形で首が垂れ下がり、しかもそれがボトッと落ちるのが忌み嫌われる」などの指摘もある。

Summary: Edible Landscape means the environment composed of edible plants. This study aimed at analyzing the relationship between the residents' memories of their childhood age collecting edible plants or other things and today's edible landscape surrounding them, comparing three different residential areas by the questionnaire survey. As a result these following points are made clear: 1) The experience of childhood age touching edible landscape has strong relationship to today's edible landscape of their private area. 2) The describing of individual meaning to the edible plants by residents shows various context binding the element of the meaning of edible landscape. 3) The edible landscape in public land missed such multiple meanings like the edible plants in private gardens, etc.